

2024年11月10日（聖霊降臨後第25主日、特定27、B年）

牧師メッセージ

「長い祈りと二レプトン」

（マルコによる福音書12: 38-44）

司祭ヨセフ太田信三

律法学者は、律法に込められた神の思いを人々に伝え、それを率先して守るべき人々でした。なぜなら、夫を失ったやもめは、生活の糧を得ることが困難なうえに、様々な社会的な権利も奪われ、極めて弱い立場にあったからです。しかしその律法学者が、律法では守るべき存在とされているやもめを食い物にしていたとしたら、本当に救いの無い話です。今日の福音によれば、残念ながらそういう現実があったようです。彼らは長い服を着て権威を披露して歩き、上席、上座を好みました。しかしその一方で豊かな知識を利用してやもめの財産を不当に手に入れていました。彼らはそのことを、見せかけの長い祈りをするでごまかしました。彼らのうちに神への思いがあったなら、彼らはやもめを大切にしたりははずです。しかし、やもめを食い物にしていた彼らにとって、律法は自分に都合の良い道具であって、そこに神は不在でした。

賽銭箱に多くの金持ちがたくさん入れているのに対し、やもめは「二レプトン」を投げ入れました。レプトンは新約聖書の中で最小の貨幣です。当時レプトン銅貨二枚で買えるのは小麦粉一つかみだったと言われていています。これは今日の旧約聖書に登場するやもめに残されたのと同じ量です。つまり、それはその日一日命をつなぐ最低量の糧でした。それを賽銭箱に投げ入れたやもめは、生活のすべて、生きるために必要なすべてを神に託したのです。それを見た主イエスは、彼女こそが「だれよりもたくさん入れた」と言われます。

見せかけの長い祈りではなく、生活全体を神にささげる、神にかける心を神は求めています。やもめの姿は、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」という最も重要な掟そのものです。その人は、今日の旧約聖書のやもめのように、食べ物に事欠かなくなるほどに恵みを受けます。わたしたちには、このやもめの信仰が求められています。それと同時に、わたしたちには「隣人を自分のように愛しなさい」ということが求められています。律法学者のように隣人を軽んずることなく、神を愛し、隣人を愛するところに、わたしたちの歩むべき道があります。その先にこそ、主イエスが示してくださる、神の国が広がっています。